
幻想に咲いた夢の花

閑野 寅歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想に咲いた夢の花

【Nコード】

N16820

【作者名】

閑野 寅歩

【あらすじ】

東方で藍霖のSSになります。藍様が仕事で香霖堂に通ったら、そのまま恋に落ちこちてしまうような感じのお話。式神としての藍様が、未来への希望を持つ。あんまり甘い展開はないです。少し長めで、ぐだぐだしてます。

（前書き）

この小説は東方projectのキャラクター。森近霖之助×八雲藍のカップリングSSです。カップリングが嫌いな方は、読まれな
いことをお勧めします。そのことをご理解していただいたうえで本
文をどうぞ。

「それで、僕は幻想郷一の道具屋になりたいと思っているんだ」
急にどこからか、そんな声が聞こえてきた。

少し前までは、ほぼ毎日聞いていた優しい声。

その声がそんなことを言った日から、何日が過ぎただろう。
わからない。

しかし、長く感じる事だけは確かだ。

「……まだ……終わらないのか？……！」

大きな九本の尾、言わずと知れた大妖怪・九尾の証を持つ少女。
八雲藍はそう叫んだ。

叫んだところで、今彼女の声を聞いてくれる影はいなかった。

一面の荒野。そこで術式を展開しながらただ一人佇む藍。

ここには、彼女を気遣う影など存在しない。うさぐさい彼女の
主人も、かわいい彼女の式も、そして——あの日、彼女に夢を語
ってくれた、あの夢見る青年も。

彼女の立つ荒野は、まるで彼女の心そのものであった。

一滴のうるおいもなく、乾いている。ただその土地は潤いを求め
ている。ひどく、激しく。

「まだかつ……！まだなのか！」

どんなに語気を荒げようと、それになびく者も、恐れる者もここ
にはいない。

彼女はようやく、自分がどうもおかしいということに気づき始め
ていた。

この場所に来るのも、来る目的も、初めての事ではない。

——それなのに、なぜ——？

感じるのは、強烈な孤独感と、郷愁のような、何かを強く求める
気持ち。

彼女の頭の中にようやく疑問符が浮かんだ。

どうしてこんなに、胸が締め付けられるような苦しさか、何か欲しくてたまらないような、心の底から何かを欲する衝動があるのか。

彼女はゆつくりと、その理由を解した――。

あれは、ほんの二ヶ月前の話。

『この幻想郷で、外界の道具を唯一扱う古道具屋』であるらしい『香霖堂』。それに私が興味を持ったのは、私の主人・八雲 紫からそんな話を聞いたからであった。

実際は、興味と言うよりは疑惑という言葉の方があてはまった。最初はその古道具屋を紫様が黙認しているのを見て、疑問に思ったのだ。

外界の道具を扱う道具屋が、しかるべき勢力と手を組んだりしたら、紫様を大きく脅かすことになるのではないか？

そんな心配が引き金であった。

私は独自に香霖堂の調査を開始したのだった。

「もう二月になるかな、君がここに来るようになってから」
時の流れるのはなんとも早かった。

当初の疑惑が晴れていき、店主の人柄がそんなに悪いものではないと確信を得るのに、一カ月とかならなかった。

「君みたいないいお客さんが常連になってくれて、僕も嬉しい限りなんだがね」

八雲の式であることがバレぬよう、それ以前に九尾であることがバレぬよう。尻尾と耳は（当然、妖力も）隠してある。

普通の妖怪を装い、この店主と親交をもってから早二月。外界の道具を扱うとは言え。その道具に対する知識は予想以上に貧弱であ

った。もちろん、この幻想郷の中では一、二を争うほどの知識であるだろう。だが、少なくとも幻想郷をどうこうできるレベルの知識でないことは確かだった。

そういう意味で、当初の疑いはほとんど晴れていた。

ある一点を除いて。

「お茶、入ったが？」

「…えっ？あ、ありがとうございます…」

いつものように来店した私を、店主はいつもどおり茶を淹れてもてなしてくれた。

ここ最近、店に通い詰めるようになってからは、来るといつもそうしてくれる。

この二ヶ月の考察に入っていた私はすっかりそれに気がつかなかった。

あわてて差し出された湯飲みを手に取り、それが予想以上に熱かったので、驚いて慌ててまた置いた。

なんだかその日の私はひどく落ち着かなかった。

ある一点だけ残る疑いに、踏み込もうとしていたからかも知れない。

「何か考え事をしているようだったが…どうしたんだい？」

流石に店主が、私の挙動不審をおかしく思ったのだろう。質問してきた。

「はい…」

私はうなずきながら、用意してきた質問をぶつけようとした。

が、その言葉を紡ぐ前に。一旦思いと留まった。

再び高回転で考えをまとめようとする。いざ、と言う時に一旦考え込んでしまうのは私の悪いくせだ。

そうとはわかってるのだが…。

香霖堂店主、森近霖之助。半人半妖。

まず、人柄はそんなに悪くない。多少野心的なところもあるが、

根は誠実で穏やかな性格。

だが、少なくとも商人には向かなかった。私が見てきた商人とは、どれも狡猾で利益に貪欲だが、この男からはそんな感じは微塵も感じられなかった。物を売る時も、純粹にその『物』を必要としている者に売る。むしろ商品を手放したくなさそうである。もう少し打算的でないと商人としてはやっていけない、幻想郷だから商売ができている、そんな感じた。

しかしそれは私の疑いを消す要素の一つとなっていた。

利益に突き動かされるようなタイプの人間でないなら、幻想郷をどうにかしようという輩と、少なくとも利益につられて手を組むことは無いからである。

その他にも、様々な情報から、疑いは晴れていった。ただ一点を残して。

どこと手を組もうと、この男が幻想郷をどうにかしようと出来るはずはないことはわかった。

しかし、この男自身がこの幻想郷をどうにかしようと考えてるかもしれないなかった。

先に述べた通り、この男には多少野心的な所がある（らしい）。外の道具を扱い、自分だけしか知らないような知識を蓄えている男だ。どんな野心を持ってもおかしくは無い。そもそも、単純な知識欲のみで外の世界の道具を収集しているとは思えなかった。

単純に幻想郷を支配してやろうとでも考えてるのか、その知識と技術で異変を起こそうとするか、それともいわゆる技術革新でもたらすつもりなのか……いずれにせよ、我々にとっては将来の敵になりうる、ということになってしまう。

少なくとも、危険分子として、いつも警戒してなければならなくなる。

そしてその傾向が現れた時、この男は『処理』されなければならなくなるだろう。

この幻想郷を守るために。そうされるだろう。

……それは純粹に、嫌、であつた。

この二月の間に、この店に情が移つたから、と言われれば否定はしない。

そうでなく、私はこの男を個人的に嫌うところがなかつた。

むしろ、その性格や趣向には好むところが多かつた。

『友人』に近いくらいの存在ですらあつた。紫様のように上からでなく、橙のように下からでもない。立場も話題も態度も、対等に話してくれる。

久しく、そんな存在と話したことがなかつた。

失いたくなかつた。

彼がどんな野心を抱いているか、それを知ることです『対等』でなくなつてしまふかも知れない。

調査なんていつからか建前だつた。

しかし、はじめに調査のつもりで来たものだから、彼について疑念が残つてしまつた。

聞かずにいることもできるだろう、だがそれは、いつか彼の野望が実現に向かう時、私はその障害でなくてはならない。その時彼に相對するのは、私だ。

その時の方がはるかに嫌だろう、苦しいだろう。

それよりは、今ここで聞いた方がいい、敵を知るのは早い方がいいし、紫様の手を煩わせることなく異変の芽を摘んでおけるだろう。その方がはるかに合理的だ。

そう、八雲の式として。

それが、当然だ。

その日何週目かわからない思考の循環を経て、私の意識は再び店內へと戻つてきた。

もう何度も思考を繰り返していたので、思考から結論までそんなに時間は経っていなかつたらしい。

お茶をすすりながら、彼は私が口を開くのを待つていてくれた。

意を決して、私は言った。

「あの、霖之助さんは……この先、どうしようと考えてるんですか？」

彼は、キョトンとした表情で聞いていた。

「……質問の意味が、よくわからないんだが……」
言葉が悪かったらしい、訂正。

質問するのかどうかはよく考えたのに、質問する言葉は考えていなかったと反省する。

「ええと……その、将来に向けて、どうしていききたいのか、とか……」

「それはつまり、将来の夢、みたいな事を聞いているのかい？」

「あ、それですそれです」

多少ニュアンスが違つような気もしたが、ある意味間違つてるところもないだろう。彼の合いの手に賛同する。

かく言う彼は「何だ、そんなことかい」と言いながらお茶をすすっていた。

「将来の夢……と言われると微妙だが、僕はいずれ外の世界へ修行しに行きたいと考えているよ」

「それはこの前聞きました」

問題は、その先なのだ。

外界への修行は、言うならば能力開発に過ぎない。その高めた能力で何をしたいのか？私が聞きたいのは、それだった。

「その先です、外界で修行した後。その時どうしたいんですか？まさか外の世界に骨を埋める訳ではないでしょう？」

少し語気が荒くなってしまったせいなのか、聞かれたくないことだったのか。彼は少し困つたような顔をした。

「……君もそれを聞くのか……」

苦笑しながら答えた。

「保留……ということにしてくれないかな？あんまり言いたくないんだが……」

「ダメです。どうしても言いたくないんですか、言えないようなことなんですか？」

私はなじるように彼に詰め寄った。なぜ答えをしぶるのかわからなかったし、こう言う時は強気で押すのが一番だと知っていたからでもある。

聞くのが恐いという気持ちを、抑えるためでもあったが。

「……言うのは構わないんだが……」

彼はさらに困った様子でこう続けた。

「魔理沙が同じことを聞いて答えたら、ひどく笑われたことがあったね……」

「どんな夢だろうが笑いません。言って下さい」

彼の言葉を一蹴しながら、私はあの白黒魔法使いがゲラゲラと大笑いするところを想像した。

笑うくらい途方もない、壮大な夢なんだろうか。そんなに野心に満ちた夢なのだろうか。

襲い来る後悔の念を振りはらいながら、私は彼の言葉を待った。

「…僕はね、いずれ、外の世界へ修業したいと考えてるんだ。道具屋として成長して、またここへ帰ってきて、それで、」

「それで？」

淡々と話す彼を促す。

一瞬の硬直。

「……それで、僕は幻想郷一の道具屋になりたいと思っているんだ」

私は声を失った。

「えっ？」と思ったが声が出ない。恐らくその時の私は口をポカッと開けて、さぞかし間抜け面であっただろう。

「知識も、商品も豊富に、人間も妖怪にも便利なものを売る。そんな、幻想郷で一番の道具屋になりたいんだ」

「……………」

言い終えた彼が、私の反応をちらちら伺っているのがわかった、

どうやら笑われたというのは本当らしい。ずいぶん気にしているようだ。

しかしそれは、今言ったことが本当のことと言つことを意味していた。

「幻想郷一の、道具屋……」

私はつぶやいた。私が想像していたどんな夢よりも、よっぽど健全で、いい夢であつた。

「ぶっ……」

思わず吹き出した。

もちろん彼の夢に、ではない。私に、である。

なんとまあ、無駄に計算高い杞憂だったのか！

そんな自分がおかしくなったのと、もう一つ。

彼は今まで通りの彼でいいのだ、という安心感が、私に笑いをこみ上げさせた。

とうとうこらえきれずに笑いだした私を見て、彼は無然とした表情でつぶやいた。

「…笑わないと言ったじゃないか…信じていたのに…」

どうやら少し本気で落ち込んだらしい彼を見ると、私は余計におかしくなってしまった。

しかしこのままでは流石に彼がかわいそうなので、笑いを必死にこらえながら、私は言葉を紡いだ。

何度考えても、紡ぐとは予想もしなかった言葉を。

「ふふっ……でも、いい夢だと思います」

当然彼はそれでも不機嫌そうな態度を崩さなかったのだが。

私はもうそれで充分だった。

そう油断していたから、彼にやり返されたのだが。

「……じゃあ、そういう君の夢はなんなんだい？」

ようやく笑いがおさまった私に、彼はそんなことを言った。

私は彼の問いに答えることができなかった。

式としての私に、夢などあるわけがなかった。

それは不自然なことなのだろうか。

そんな私に彼はこう言った。

「じゃあ、君はどうして、何に向かつて生きているんだい？ 未来に何も希望がないのに、生きているのかい？」

不思議そうにそう言った。

見るからに無知な生き物ならともかく、君のような頭の回る妖怪がそうなのはおかしい、と言うのだった。

そうなのだろうか？

私はその日の帰り道。それをずっと考えていた。

だが、その時間さえ充分に与えられなかった。

私は突然目の前に現れた紫様に、これまた突然詰問されたのだった。

曰く、あなた、何していたの。と。

数瞬の硬直の後、正直に白状しようとした私を制止して、紫様は言った。

かつてないほどに、この幻想郷を守る結界が壊れているらしかった。

原因は聞くまでもなかった。

ただ一つ、結界を管理する私の怠慢だ。

最近、香霖堂へ行く時間を確保するため。壊れた結界の補修を簡易に済ませていたツケが回ってきたのだ。

式として最悪の失態である。

紫様は自分も結界の補修に回ると言った。それほどまでに事態は深刻であつたらしい。

そうして私は、紫様のスキマで飛ばされた。

最も損傷の激しかった所だと紫様が言った所。
見渡す限りの、荒野へ。

薄暗く、乾燥しきつた荒野で、彼女の術式だけが淡い光を放っていた。

地に浮かんだ魔方陣のような紋様、そこから発する光は、さながら彼女の希望、心の支えであつた。

彼女はそれをひたすら魔力をつぎ込み、結界を補修していく。

それは、彼女の主人が見ても驚くようなスピードで補修されていた。

自らの失態を取り戻そうとするからではなかった。

「……会いたい」

ぼそつと、彼女はつぶやいた。

ここに来てから、ずっと苦しめられてきたよくわからない欲求。

彼女は、この果てしない寂しさのようなものが何なのか。ぼんやりわかつていた。

そして、確信する。

「彼」を求めた心の奥底からの叫びを。

「会いたい」

はつきりと、つぶやいた。

彼女の尾が、ざわざわと揺れた。

「夢とは、将来そうでありたいと思うこと」

立ち昇る魔力が、増幅していた。

目が赤みを増し、狐のようにやや細まった。

「…私の夢。見つけました」

微笑む、柔らかに、優しく。彼に見せるように。

「これからも紫さまの下で、この幻想郷を守りましょう。それで、

誓うよう、目を閉じる。

「あなたが望む幻想郷を、あなたが望むその夢を――」

あなたと一緒に守れたら、そう思います。

見渡す限りの荒野に一輪。

小さくも美しい花が、咲いた――。

（後書き）

一応、本文とは切り離れた後日談があるので、そちらに続きます。

続きますが、後日談は勢いだけで仕上げたようなものなので。読まなくても物語上の重要な部分は一切ありませんので。読まなくても大丈夫と言えば大丈夫です（

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1682o/>

幻想に咲いた夢の花

2010年12月31日23時00分発行